

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0465 ◆◆◆

18/01/10

【 経験則では非常に興味深い 1 月相場 】

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

ドル/円相場が依然として動意の兆しをみせていない。年明け以降、10 日近くが経過したものの、そのあいの値幅は 1.4 円ほどに過ぎず、引き続き昨年 12 月以降のボックス圏に留まっている。ただ、詳細は後述するが、経験則にみて 1 月相場は幾つかの意味で非常に興味深く、ドル高 or ドル安どちらの方向に動くのかなど、年間見通しを考えるうえでも重要だ。月間を通しての動静をしっかりと見極めたい。

◎過去 3 年連続で「1 月に年間の天底」を示現、今年も!?

まずは、1 月相場の戦績について、1990 年以降昨年まで過去 28 年間で振り返ってみると、勝率は 13 勝 15 敗となっており、ほぼ五分だった。そうした意味において、明確な方向性はいかたがえない。エコノミストのあいだなどでは、「名実ともに新年入り、新しい四半期に入ること機関投資家を中心とした外債投資が期待できる」ーなどといった声、つまり需給面からはドル高有利との指摘が聞かれていることも少なくないが、過去の経験則を参考にすると、必ずしもそうは言えないようだ。

そんな 1 月相場には、特徴が幾つもあるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の 3 つだろう。ひとつずつ順を追って説明を施したい。

まずは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く月はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない月はピタリとベタ凧状態が続くことが少なくないようだ。前者について最近でいえば、2015 年の 1 月は変動幅 4.89 円で年間 3 位の変動を記録していたほか、昨 2017 年も変動幅 6.52 円で同 1 位となっていた。

それに対して、後者の「動かない 1 月相場」は、2003 年と 2004 年に 2 年連続で月間変動幅がともに年間 11 位、2011 年と 2012 年は同様にそれぞれ同 10 位の小変動に留まったことがある。今年の 1 月相場は果たしてどちらのケースになるのだろうか!?

次に、一年 12 ヶ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は「1 月に一年の天底をつける」ケースが非常に多い。

実際、1990 年以降昨年までの 28 年間で 11 回の「年間天底」を記録していた。確率にすると、およそ 4 割であり、実際に喫緊の事例だけを取り上げても、2015 年は 1 月に年間のドル最安値を示現しているほか、2016 年と 2017 年は逆に 1 月高値が結局年間を通したドル最高値となっていた。ドル高値 or ドル安値のいずれになるかは不明だが、今年も同様の事態発生について注意を要するのかもしれない。

最後 3 つ目の特徴は、「1 月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」ーことになるだろう。つまり、1 月の月足が陽線であれば、その年一年間はドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなる公算が大きい。

ちなみに、こちらについても 1990 年以降昨年まで過去 28 年間の戦績を調べてみると 17 勝 11 敗、6 割程度の的中率を誇っていた。たとえば、昨 2017 年も 1 月の月足陰線で、年足も陰線引けだ。ともかく、飽くまで参考程度の要因として、頭の片隅に是非とも留めておいて損はない気がする。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

